～交配相談レポート～

有限会社 北の大地
交配相談による牛群の変化について

図1 過去10年間近交係数の推移

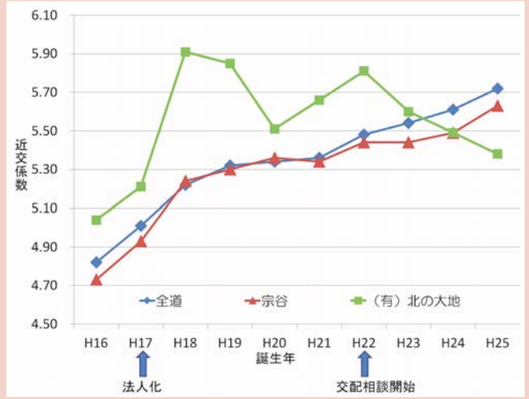


図2 飼養規模別平均近交係数



図１のグラフは北海道北部に位置する猿払町にある「有限会社　北の大地」の過去１０年間の近交係数を示したものです。

近交係数の上昇は大規模牧場にとって頭を悩ます問題であり、日本ホルスタイン登録協会北海道支局の調べでも、飼養頭数規模の増加は平均近交係数の増加につながると示唆されています。（図２）



写真①　フリーストール牛舎内

当牧場も飼養頭数が約８００頭と多く、近交係数のコントロールは課題の１つでした。

しかし「平成２２年に交配相談を始めてから、意識しないうちに近交係数が下がっていきました。」と井上裕幸さんは話してくださいました。

今回は「有限会社　北の大地」代表取締役　井上勝敏さんのご子息で構成員の井上裕幸さんに「ジェネティクス北海道交配相談サービス」による牛群の変化についてお話を伺いましたのでご紹介いたします。

～はじめに～

（有）北の大地は、平成１５年に親戚同士の３戸を構成農家として法人化され、平成１７年に稼働し今年で１０年目になります。交配相談は平成２２年に開始され、今年で５年目です。「交配相談を始める前は、３千円から４千円の精液をメインに使っていました。子出しが良ければ近交係数を気にせずにかためて付けることも多く、在庫が無くなるまで１種類を使い続けたこともありました。そのころの近交係数は高かったですね。法人化後、順調に頭数が増えてくるにしたがって精液代のコストが無視できないものになってきました。そのため精液代を抑えて、その中で最大限の改良がしたいと思い交配相談を始めることにしました。無料というのもきっかけでした。」

～効率を求めて～

法人化と大規模化に伴い、今まで以上に牛に効率の良さを求めるようになったそうです。搾乳作業をよりスムーズ・スピーディーにという目標のために改良形質は第１形質に「後乳頭の配置」、第２形質に「乳器」を設定されています。

「搾乳性が悪かったり、ミルカーがかけづらいと搾乳に時間がとられるので、そのような牛はどうしても淘汰対象になります。そのため今は乳器を重視しています。昔は、乳頭が開かないように中央靭帯の強い種牛を選んだり、大きな牛の方がいいのかなと思っていた時期もありました。でも毎日毎日牛を見ている中で、小柄な方がうちに合っていること、中央靭帯も重要だけど乳頭の配置が垂下している方が作業しやすいと実感するようになりました。長く交配相談をやっていますが、改良したいと思ったことはその都度ＧＨの担当者に相談し、種雄牛の選定や改良目標形質の見直しを行っています。」



写真②　取材を受けてくださった井上裕幸さん

～牛にも変化が～

効率を求めて改良してきた結果、牛にも変化が見られるようになったそうです。全国的にも後乳頭の配置は年々内付傾向へと進んでいますが、交配相談によって生まれた初産娘牛を見せていただくと、搾乳しやすそうな、後乳頭がまっすぐ降りている個体が多くみられました。（写真③）

井上さんも「乳頭の配置は気にならなくなってきました。意識しなくなったという感じです。いい意味でも悪い意味でも「目立つ牛」や「気になる牛」は群で飼う場合には手を焼きます。作業しやすくて故障のない牛ほど「目立たない牛」ですし、そのような牛を増やすことが世代交代をする上でも重要なテーマだと思っています。誰が扱っても作業しやすい牛を増やすのが目標です。」とおっしゃっていました。



写真③　後乳頭が垂下しています!!

次のページへ続きます。